

外為法改正と為替レート

東芝が外為法の適用問題で揺れている。安全保障に関わる外資の導入を規制するために昨年改正された外為法だ。

外為法の改正はこれまで為替取引にも大きな影響を与えてきた。代表的な事例の一つは 80 年の外為法改正だ。資本取引の部分的自由化を実現した。それにより外貨買いが自由になり、ドル預金などの形でドル需要が増大した。貿易収支の黒字基調を背景に円高傾向の続いた相場が円安傾向に反転した。市場における資本取引の力を初めて見せつけた。なおこの頃は実需原則があり、為替取引は実需のみで投機為替は認められていなかった。実需原則は 84 年に撤廃。

もう一つは 98 年の外為法改正だ。大幅な改正で新外為法とも呼ばれた。資本取引が完全に自由化され、付随する為替取引が増加した。為銀主義も撤廃された。それまで為替取引は外国為替公認銀行(為銀)を通して行われた。新外為法では為替取引の仲介は誰でもできるようになった。これにより為替取引業者が多数生まれるようになり、個人の FX 取引の発展が促された。

一方昨年の外為法改正の為替取引へのインパクトはない。敢えて言えば、安全保障の観点から海外からの投資が抑制される可能性があるので円安要因だ。ただ全体の資本流入の規模から見れば小さく、為替レートの傾向に影響を与えるほどではない。

その点では現在の全体的に低調な為替取引の起爆剤にはならないのは残念だ。特にドル円は値動きも少なく市場の関心が遠ざかる。こんな時は、「休むも相場のうち」なのだが、為替の好きな人はそうはいかない。相場のアイデアがないのに手が出てしまう。そしてポジションを持った途端に自分のポジションに有利な材料しか見ず、全体的な視野を欠く。いわゆる「ポジショントーク」になる。だからなかなかうまくいかない。これなら休む方がいい。

だが一方でポジションを持つと相場に真剣に向かい合い、相場が読めるようになる人もいる。アイデアがない時に持った最初のポジションにこだわらず売買を繰り返す。相場に入ることによって市場のリズムや方向観を得る。これもまた真実だ。結局人により違うわけだから、両方やってみて自分に合う方を選べばいい。

市場が低調な時は普段は目がいけない通貨を研究するのもいい。小さなポジションから始め、ストップロスはきちんと置く。そうした通貨の中から自分の得意な通貨を発見できれば今の低調な相場も意義あるものになる。